

兵庫県の方言語彙

——言語地図とその解釈——

鎌 田 良 二

方言語彙の各地における相違には二つの型がある。語形変化と意味変化とである。

語形変化とは、一つの意味についての語形の違いである。たとえば、「恐しい」ことをコワイというか、オッカナイというかなどである。

意味変化とは、一つの語形についての意味の違いである。たとえば、「コワイ」という語形を、「恐しい」の意味に使うか、「飯などが」固い」という意味に使うかなどということである。

本稿での「くるぶし」「お手玉」は語形変化であり、「カッテクルの意味」は意味変化である。

本研究についての臨地調査は、昭和五十二年度本学卒業生、今西典子・岡本佳子・緒方みどり・守本照子・吉井貴子・吉川理子が、昭和五十二年七月・八月・十月に行なったもので、調査地点は県下及びこれに接する京都府・鳥取県・岡山県境である。ただし、淡路島は行っていない。調査語彙は二百九十語であるが、本稿では「くるぶし」「お手玉」「カッテクルの意味」の三語について記す。

本稿の地図作成は吉井貴子である。

兵庫県は近畿方言圏にあるが、県北部と県南部とは大きな差があり、北部の但馬は中国方言圏にある。但馬と播磨との違いの主な事象は次のようである。

但馬

播磨（摂津・丹波・淡路）

乙種アクセント

甲種アクセント

アイ連母音同化

アイ連母音不同化

単音節長音化なし

単音節長音化有り

ダ・ザ・ラ行訛音化無し

ダ・ザ・ラ行訛音化有り

(洗) アラッテ

(洗) アローテ

駅カラ待ツ（駅で）有り

駅カラ待ツ 無し

指定助動詞 ダ・ダロ

指定助動詞 ヤ・ヤロ

(一部、ジャ・ジャロ)

(一部、ジャ・ジャロ)

(会) アーテ (買) カーテ

(会) オーテ (買) コーテ

(起) オキヨー、オキユー (意志)

(起) オキヨー (意志)

このような大きな違いを持つ県北部と南部との間における語彙面での相違はどのようになっているだろうか。但馬と鳥取県東部との関係、また、京都府との関係。

県南部の播磨・丹波・摂津との関係や、神戸・芦屋・西宮・尼崎などの市部と、その他の郡部との関係など、いろいろの面で語のうつりかわりについて言語地理学的研究を試みたいと思ったのである。

語の移り変わりをみるためには、全国的視野に立つて見るべきものと思ったので、調査語彙は『日本言語地図』（全

六卷、国立国語研究所編）、『中国五県言語地図』（広戸惇著）からとったものに約五十の語をつけ加えた。

調査地点は次の通りである。地点番号は『日本言語地図』の番号による。

京都府		兵庫県	
5590.81	竹野郡網野字倭野	6409.72	豊岡市豊岡
6500.33	中郡峰山町	6419.15	出石郡出石町内町
6409.36	熊野郡久美浜町	6419.28	〃 但東町
6409.58	〃 野中支所	6419.39	〃 〃 久畑
6429.19	天田郡下夜久野額田局	6419.20	城崎郡日高町
6500.54	中郡大宮町	6409.00	〃 竹野町
6500.56	与謝郡岩滝町岩滝口	6408.15	〃 香住町香住
6500.84	〃 野田川町	6407.27	美方郡浜坂町居組
6510.03	〃 加悦町	6407.79	〃 温泉町湯
6500.89	宮津市宮津	6408.62	〃 村岡町長瀬
6511.42	舞鶴市西舞鶴	6418.21	〃 美方町石寺
6510.65	加佐郡大江町字南有路	6418.13	〃 村岡町村岡
6520.25	福知山市下柳町	6418.53	〃 〃 福岡
		6418.74	養父郡関宮町出合
		6418.76	養父郡関宮町関宮
		6428.16	〃 大屋町筏
		6418.97	〃 〃 樽見
		6418.69	〃 八鹿町高柳
		6419.40	〃 〃 八鹿
		6419.70	〃 養父町
		6419.92	朝来郡和田山町和田山
		6429.15	〃 山東町梁瀬
		6429.61	〃 朝来町
		6439.01	〃 生野町
		6520.60	氷上郡氷上町御油
		6530.81	〃 〃 天岡
		6530.12	〃 〃 石生
		6530.51	〃 山南町岡本
		6429.59	〃 青垣町遠坂佐治

6530.75	氷上郡市島町梶原南	6439.41	神崎郡神崎町加納	6552.67	尼崎市西本町
6530.04	〃 春日町稲塚	6438.89	〃 市川町鶴居	6552.63	西宮市社家町
6530.07	〃 〃 下三井庄	6448.29	〃 福崎町	6552.52	芦屋市浜町
6530.09	多紀郡西紀町本郷	6438.13	安栗郡波賀町谷	6552.60	神戸市灘区畑原通
6530.37	〃 〃 小坂	6438.33	〃 一宮町横山	6550.79	〃 生田区北長狭通
6530.48	〃 篠山町西浜谷	6438.80	〃 山崎町高下	6530.89	三田市母子
6531.42	〃 篠山町東本庄	6438.82	〃 〃 三谷	6540.69	〃 加母
6530.95	〃 今田町釜屋	6437.07	〃 千種町岩野辺	6552.13	〃 小野
6439.06	〃 加美町鳥羽市原	6428.22	〃 波賀町道谷	6552.13	宝塚市口谷
6439.26	〃 〃 観音寺	6437.34	佐用郡佐用町上石井	6552.15	伊丹市北伊丹
6439.67	〃 中町安楽田	6447.84	〃 〃 佐用	6469.09	明石市大久保町
6439.69	〃 黒田庄町喜多	6447.27	〃 〃 三日月町三日月	6458.07	姫路市中二階町
6439.97	〃 八千代町下三原	6447.06	〃 南光町米田	6459.41	高砂市曾根町
6449.28	加東郡滝野町河高	6447.03	〃 上月町櫛田	6457.29	相生市相生
6449.48	〃 社町家原	6447.12	〃 〃 久崎	6447.64	赤穂郡上郡町本町
6540.52	〃 東条町吉井	6448.60	竜野市竜野町門外	6457.36	赤穂市加里屋砂子
6449.32	加西市上道山町	6449.96	小野市久保木町	6457.44	〃 塩谷西
6439.99	西脇市堀田町	6550.11	三木市細川町桃津		
6438.59	神崎郡大河内町寺前	6552.36	伊丹市南野字辻		

鳥取県

6407.93	岩美郡岩美町岩井	6417.85	八頭郡若桜町中原	6436.57	勝田郡勝田町真加部
6417.50	八頭郡家町奥谷	6427.18	〃 〃 小船	6457.10	備前市三石
6416.98	〃 用瀬町用瀬	岡山県		6456.16	和気郡吉永町吉永中
6417.80	〃 船岡町郡家	6437.23	英田郡大原町下町	6456.15	〃 和気町和気
6417.61	〃 八東町大字安井宿	6446.99	〃 作東町川北	6436.60	津山市堀坂
6417.72	〃 〃 北山	6446.35	〃 英田町上山		

「くるぶし(踝)」

人間の足の下端において両側へ突出している骨の突起のことである。

『日本国語大辞典』（小学館）の語源説によれば、①クルフシ（転節）の義〔和訓栞〕、②クルクルブシ（枢節）の約〔大言海〕、③「跟踵」の別音Kup—Siにラ行音をはさんだ語〔日本語原考・与謝野寛〕とある。

「踝」の字は古くから使われていたようである。

正倉院文書・神亀三年、山背国愛宕郡雲上里計帳（寧楽遺文）に「男出雲臣石楯、年参拾歳、残疾右足踝筋絶左上頬黒子」とある。

県下の南部一帯にウメボシ（四九地点）とウメノボシ（一地点）があり、北部の但馬地区ではクルブシ（二五地点）、クルビシ・グルブシ・クロボシ各一地点、計二八地点のクルブシ系である。このクルブシ系は但馬に接する京都・鳥取にあり、岡山もクルブシ系である。

ツノコブ・ツノコブシ・ツノコボシ・ツノブシなどのツノコブ系はいずれも鳥取県につながる但馬南部地域である。但馬に続く京都地域にはないことからここでは一応東山陰系のものとみる。

ツノコブと同じコブ系に、コブと、アシノコブ・サンネンコブ・ソトコブ・コブラ・ソトコブラ・コブシがある。いずれも地点は少ないが中国地方側、鳥取・岡山側にあることからみて、先のツノコブと同じ系統であり、ツノコブからコブになり、単なるコブと混同するためか、足の外側という意味で、ソトコブとか、アシノコブなどの形になり、「ふくらはぎ」の意のコブラと混同したためか、ソトコブラから、コブラなどの形がでたものかと思われる。コブシは、「拳」の形と同意にとったものかと思われる。

グリグリとアシノグリグリが県下に広く、播磨と但馬にみられるが、この種のを一般にグリグリということ。①押えつけながら強く回す、または丸めるさまをいう。②いかにも丸くて大きいさま。③かたくて丸みを持ったものが内部でゆれ動くさま。などからこれもコブと同様に一般的名称とみられる。

カタツムリ・ツンブリ・ツノブリムシはいずれも京都側にある。これもその形状から出たものと思われる。キビス・アシクビは、これを被調査者にたずねるとき、調査者が自分の足の「くるぶし」を指して、「この骨の出ているところを何と言いますか」などの形でたずねているため、「かかと(踵)」や「足首」と間違えて答えたものであろうか。いずれも地点数は合計三地点である。

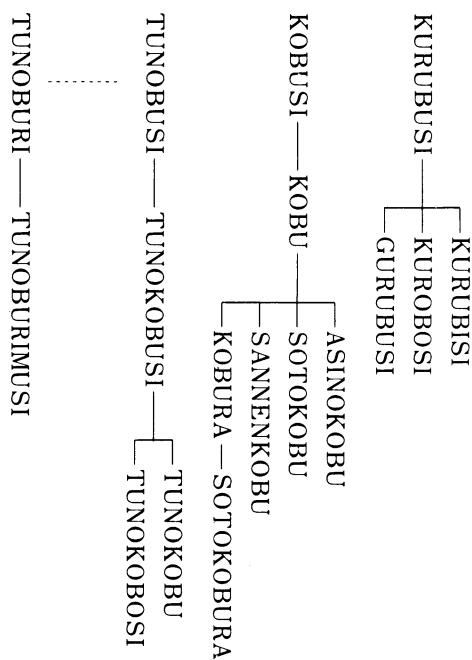
この地図から次のように考える。

クルブシ系は京都を中心とした古くからある形であるが、あとからできたウメボシ系によって周辺に追いやられた周辺分布の原則によるものである。京都側に残るクルブシ系もあるが、京都府での外側、周辺部である。『日本言語地図』でも、県南部はウメボシ系であり、京都北部はツノブシでこれが県北東部の出石郡に続き、但馬西部でツノコボシになり、鳥取県に入りコブ系になっている。ツノコボシは、「角」と「子」「星」か、「角」と「コブシ(拳)」の音

訛か。『子』『節』か。

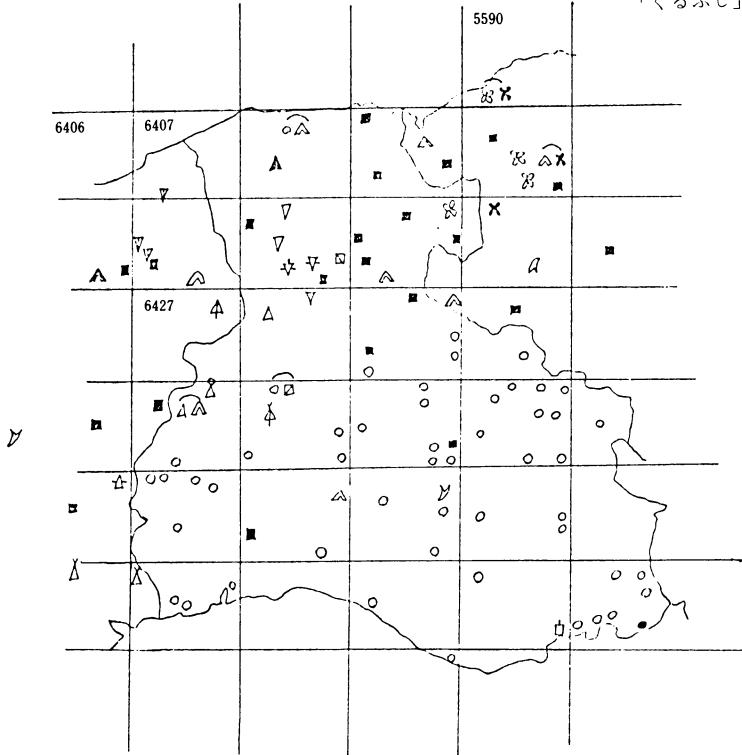
いずれにしても、ゴブはどこにでも生まれ得る形であり、特に、アシノコブはすぐ考えられる名称である。同様に足の両側に出ていることから「角」も考え得るし、それと合わせたツノコブ。また、「関節」というようなことから「フシ・ブシ（節）」は考えられることである。このようなことから、ツノ系とゴブ系はいずれも新しい語形であろうが、その分布のひろがりからみてまだ新しいものと見るべきだろう。

クルプシ系が標準語形になっているのも、京都にとっては古い語形が、東京に移動しているものとみる変化形を次のようにみる。



(図一)

「くるぶし」



- | | | |
|--------------|-------------|--------------|
| ○ ウメボシ(49) | ⌘ サンネンコブ(1) | ▽ ツノブシ(3) |
| ● アシノウメボシ(1) | ▲ ソトコブ(1) | △ グリグリ(9) |
| ■ クルブシ(25) | ⌘ コブラ(1) | △ アシノグリグリ(1) |
| ▣ クルブシ(1) | ⌘ ソトコブ | ⌘ ツンブリ(4) |
| ▤ グルブシ(1) | ☆ コブシ(1) | ⌘ ツノブリムシ(3) |
| ▥ クロボシ(1) | ▽ ツノコブ(3) | ♯ キビス(2) |
| △ コブ(2) | ☆ ツノコブシ(1) | ♯ アシクビ(1) |
| ▲ アシノコブ(1) | ☆ ツノコボシ(1) | |
- (数字は使用地点数)

「お手玉」

「お手玉」は、女兒の遊びの道具で、小豆などを入れて作った小さな布袋で、これを幾つか持って投げ受ける遊びに使うものである。ここでは、その「遊び」そのものを言うのではなく、その道具の意味である。

「お手玉」の方言語形は全国に多く、『日本言語地図』では約二百五十種の語形がでている。

イシナゴ系は北九州と兵庫・鳥取東部と岡山に目立つ。兵庫では、県中央部を横切る形で、これが京都府東へとつながっている。丹波と摂津にはない。

オジヤミ系は、京都府中南部から丹波・摂津に続く。これは、京都府から石川県へ続くものであるが、途中の福井県はと切れている。

また、三重から東海方面をも含めている。西は香川・徳島・高知であり、広島・宮崎に目立つ分布をなしている。兵庫県の但馬はコボシが二地点とズズが一地点である。

そのほか、摂津から播磨南部にはいろいろの語形が入り混っている。

これが『日本言語地図』からみた状態であるが、今回の調査では(図3)にみるように、オテダマ・テダマが神戸や但馬・播磨など合計七地点に点在する。これは標準語形であるためであろう。

このように方言語形が各地に多い場合であって、しかも、標準語形が各地に点在する場合は、その標準語形は一応無視するというか、別に見てもよいものと思う。標準語形は教科書語形、新聞語形、テレビ語形であって、どこの地の人でも一応はそれを知っているものである。即ち、理解語形である。インフォーマントは使用語形と理解語形とを誤って答えることがあるものである。

標準語形が使用語形であるならば、点在・散在の形よりも、いくらかの使用地域範囲があるものである。

オジヤミ系は丹波およびそれに接する京都府側に多く、また、東播磨に多いことは『日本言語地図』と一致するも

のである。(図3)では、オジャミ、四十七地点。オジャメ、一地点である。『日本言語地図』と異なることは、但馬に四地点オジャミがあることである。

これは播磨から新しく入ったものと思われる。しかも、これは、但馬唯一の都市部、豊岡市と、その次に大きな町の香住町であることは地方における文化的中心地であるからである。

但馬はナンゴ系である。『日本言語地図』では先に記したように、イシナンゴは県中央部を占めていたが、いくらか北寄りになったということは、周辺分布になったということになろうか。『日本言語地図』の調査が昭和三十年頃であるから、僅か二十年でそれ程動くとは考えられないが、一応そのように見ておくことにする。

鳥取からコボシ系がいか所入って来ているが県境である。

『日本言語地図』ではこの辺りにコボシは二か所であったものが今回は鳥取県境八頭郡若桜町あたりにコボシキ、兵庫県美方郡にコボシがいか所見られるだけである。これもコボシが周辺に移った、即ち、ナンゴ系に押しやられて周辺に移った形とみられる。

オサラ系に、オサラ・オーサラ・オーサーラがある。これはいずれも但馬南部と岡山県境である。

山本俊治・飯野百合子「兵庫県——その分布と分流——」(『武庫川女子大学紀要・第十集』昭三七)によると、オサラ系は岡山県境からずっと東まであり、明石市あたりまである。それが今回はこのように西に寄ってしまった。神戸からみれば周辺部に寄ってしまったということになる。

オシト系が県南部に見られ、しかも、播磨の西南部に多い、これと、ナナツ・オナナツのナナツ系とはともに、オシトツ(一つ)、ナナツ(七ツ)で「お手玉遊び」のときの「数」をあらわすものと考えられる。

この形がもと県南部に広く使われていたものであるが、関西、特に近畿中央部の京阪あたりからオジャミ系が広がってきたので、オシト系が南西部に追いやられた形とみられる。

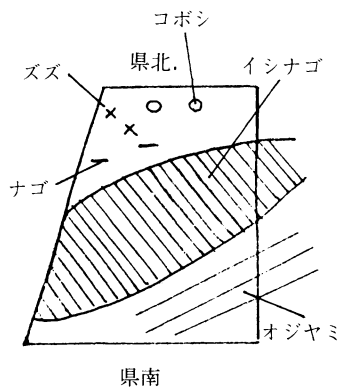
山本氏らの調査でも、やはり宍粟郡と赤穂市、赤穂郡あたりの南部に限られている。

オサクロ系は、今回わずか三地点にみられ、これも岡山県境であるが、山本氏らの場合には明石市から姫路市をはじめ県南西部にある。ジャミと並存であるが養父郡にもみられることから、これも古い形であり、いずれもオジャミによって周辺に追いやられた周辺分布の法則によるものとみられる。

イイチコとイッコーが三地点、播磨の中央部にみられるが山本氏らの調査ではオイチコ・イーチコ・イーテコがあり、同じく播磨中央部の神崎郡あたりに見られる。

「お手玉」の語形は『日本言語地図』や、山本氏らの調査と、今回の調査とを比較すると、神戸などを中心とする県南部のオジャミ系がその範囲を北と西とに広げ、その外側にあったイシナゴ系がまた北と西とに寄ったことになる。そしてその他の語形が山本氏らのものとくらべて少なくなっているようである。

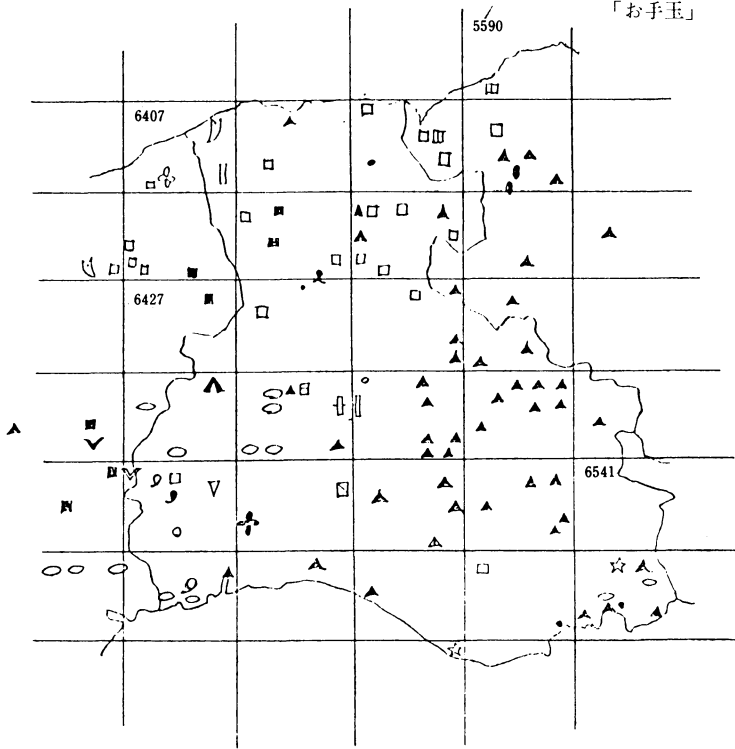
(図二)



「カッテクルの意味」

東西方言の境界を論じる場合「買」のカッタとコータを問題にすることがあるが、最近の若い人の間では関西でも

(図三)



- | | | |
|-------------|------------|------------|
| ● オテダマ(6) | ■ オシナゴ(1) | △ コボシキ(1) |
| ○ テダマ(1) | ◇ オサラ(2) | □ イッコー(1) |
| ▲ オジャミ(47) | ♀ オーサラ(1) | ⊥ イイチコ(2) |
| △ オジャメ(1) | ス オーサーラ(1) | ● オチャボコ(2) |
| ■ ナンゴ(7) | ⊕ ナナツ(1) | ☆ オンバラ(2) |
| □ イシナンゴ(20) | ⊕ オナナツ(1) | ○ オシト(13) |
| □ イシナゴ(1) | △ オサクロ(1) | ▽ オイコ(1) |
| □ イシナンコ(1) | ▽ オサクラ(2) | |
| ■ イシニヤコ(2) | △ コボシ(1) | |

(数字は使用地点数)

「買」をカッタという傾向がでてきている。また、若い人に限らずいくらかこの形が一般化してきていることも考えられる。

関西では「買ッタ」と「借ッタ」とは同音衝突する可能性がある。

「橋」と「箸」とは文脈上その違いは明らかである場合が多く同音衝突のおそれはないが、「買」と「借」とは文脈上区別がつかず話しことばにおいて衝突をおこす。

ここに兵庫県下における「カッテクル」の意味について調査したものを(図4)に示す。

まず、但馬地域においては、「買」の語形は、カータ・カーテクルであり、「借」はカレタ・カレテクルである。

「借」のカレタ・カレテクルは可能動詞形からの変化とみられるが可能の意味ではない。「貸」もカセル・カセタで可能の意味ではなく使われる。

(借) カレン カレタ カレル カレリヤ カレイ(命令) カリヨ(意志)

(貸) カセン カセタ カセル カセリヤ カセイ(命令) カシヨ(意志)

可能には助動詞レルをつけて、カレレル、カセレルとなる。

(図4)の中における「使用せず」は、「カッテクル」の形を「使用せず」で但馬地域にあり、「借」はカレタ・カレテクルで、「買」はカータとなる地域であるとみられる。

また、京都側にある「使用せず」は、「買」をコータ、「借」をカリタとする地域と見られる。本稿では単に「カッテクルの意味」だけの図を示すのでこれにはその違いが出ていないが別に「借」の語形をも調べてある。

「買」のカッテクルは出雲などをはじめとする東山陰はいわゆる東部式のものが多く、アクセント・音韻の分野でもそうであるが、文法では指定助動詞はダの地域であり、それと同じく「買」「食」の動詞もカッタ・クッタとなる

地域である。また、関西式のウ音便ではなく関東式の促音便形である。

東山陰では

買 カウ カツテクル

借 カリル カリテクル

カレル カレテクル

の形であり、山陰の但馬で「カツテクル」を「買」「借」のどちらの意味でも使わない地域では

買 カウ コーテクル

カーテクル

借 カリル カリテクル

カレル カレテクル

の形である。

「買」は歴史的にはハ行四段活用であるからウ音便になるのは当然で、

遂にかくなり侍りぬれば、かへりてはつらくなむかしこき御心ざしを思う給へられ侍る（源氏物語）
などの例を出すまでもないであろう。

また、「借」も歴史的にはラ行四段活用である。

声はして涙は見えぬほととぎすわが衣手の濡つをからなむ（古今集）

「借」がラ行四段活用であるからカタタとなるも当然である。

したがって、歴史的には関西で使われている、「買ウタ」の *a* 連母音の相互同化により、*kauta* → *koota* となることは、神戸の「カウベ」から「コーベ」となるのと同じである。

「借る・足る・飽く・染む」は県下でひろく五段に活用するが、但馬全域と丹後（京都）ではこの中の「借」だけが、カレル・カレテクルの一段に活用する。

（図4）の中で、「両方に使う」という地域が同音衝突していることになる。しかし、これは、かたまり分布をしていない。

『日本言語地図』でもそうであるように播磨を中心とする県南部ではカテクルは「借」の意に用いるものと予想していたのに「両方」ということは「買」の方も県下各地でカテクルという形が使われ出していることを示すものである。

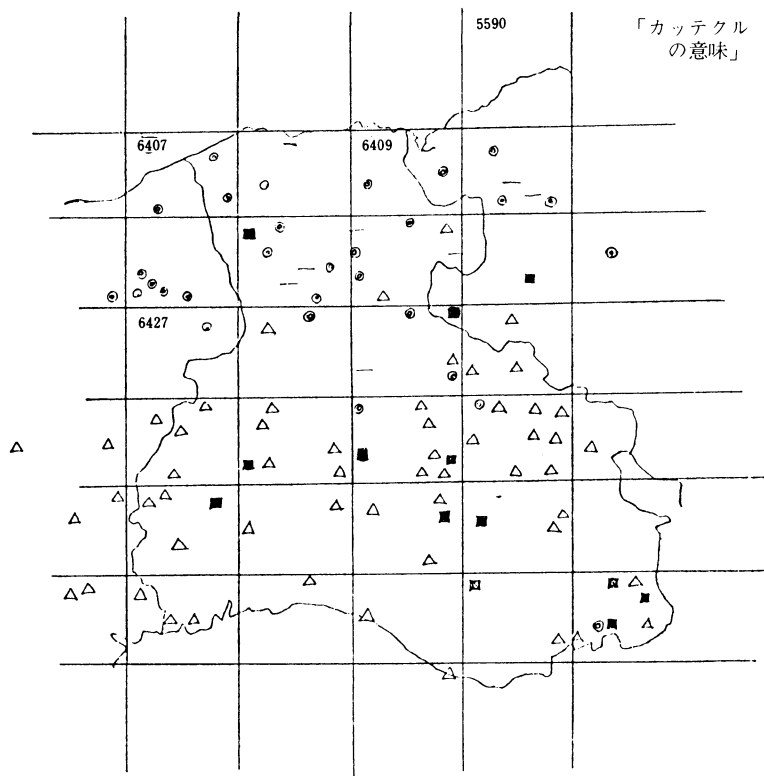
但馬は『日本言語地図』で、カテクルの語形を使わない地域となっているのに、「買」の意で使うということは東山陰の影響によるものであろうか。あるいは東山陰の影響と標準語形の意識によるものであろうか。カーテクルの語形が少なくなってきたのであろうか。

以上、「くるぶし」「お手玉」「カテクルの意味」の三図から考えられることは『日本言語地図』とくらべて少しずつではあるが神戸を中心としての使用語形が北と西とに移動しているように見える。わずかに二十年间でそのようなことが考えられるかということになるが、『日本言語地図』が当時の六十才代を中心としたのに対し、今回は五十才代を中心にしたことによるものかもしれない。『日本言語地図』の場合のインフォーマントは現在は八十才代になっていることになる。八十才と五十才との違いだろうか。

また、「お手玉」を除く二図は『日本言語地図』ではもっと単純な分布になっているのに今回の方はやや複雑になっているのは、本稿ではごく簡単な音韻変化形をも示したことによるものかと思う。簡単な音韻変化形は同系とみて記号は一つにした方がよかったかと思っている。

本調査にあたっては先に記した六名が百十三地点を数十日にわたって行なったものであるが筆者も最初の数日間、行をともした。各地において多くの方々にお世話になった。被調査名はここに記さなかったが深く感謝している。

(図四)



◎ 「買」の意

△ 「借」の意

■ 両方の意

— 使用せず